●（公開講演　鼎談）

考古学が中世史を変える

永越 信吾・村木 二郎・松田 睦彦

松田　お待たせいたしました。それでは始めさせていただきます。私のほうで司会を務めて、永越さん、村木さんのお二人からお話を伺っていきたいと思います。まず永越さんに総研大のことについて伺います。歴博を基盤とした総研大文化科学研究科日本歴史研究専攻には博士後期課程しかありませんが、永越さんが博士号を取得しようと思ったきっかけですとか、博士号に挑む場として総研大を選んだ理由はどういったところにあったのか、お教えいただけますか。

永越　まず、私も自分で中世の考古学の研究をしていたわけですが、研究の方法論などで行き詰まりを感じた時期があり、もう一度、大学院に入って勉強し直す必要性があるのではないかと考えるようになりました。

ところが、中世の考古学を学べる学校はなかなかないわけなんですね。しかも、仕事を続けながら研究をすることが可能なところとなるとなおさらです。そんな時に見つけたのが総研大です。

ここであれば自分の研究が伸ばせるのではないかということで、入学した次第です。

松田　中世の考古学を学べるところが少ないというのは、どういうことでしょうか。

永越　考古学の専攻を持っている大学は結構あるのですが、中世を専門にしている先生がいらっしゃるところは、おそらく限られているのではないかと思います。そうした中で、総研大には村木先生がいらっしゃいますし、中世以外の考古学を専門とされる先生もたくさんいらっしゃいます。方法論的に自分が研究の幅を広げていく上で、教員数が多いところも魅力でした。

松田　永越さんから、中世史を考古学の視点で勉強できるところが少ないという話がありました。今日の講演会のタイトル「考古学が中世史を変える」は村木さんにつけていただきましたが、このタイトルからは考古学が中世史に新たな知見をもたらす、という意気込みが感じられます。やはり、中世を扱う考古学というのは珍しいのでしょうか。

村木　私も最初から中世考古学をやるつもりで大学に入ったわけではないのですが、一般的には考古学というと古い時代の学問というイメージがあると思います。そういう古いものにあこがれて、考古学を始める人が多いのでしょう。

私は少し毛色が違います。もともと歴史は好きだったのですが、考古学という方法論が面白いから、その方法で歴史をやってみたいというところから入りました。一般的には古い土器が好きだ、石器が好きだ、というところから入ることが多いと思いますが、私は土器にも石器にも特に興味がありませんでした。何か面白そうなものはないかと探しているうちに、抹香臭い仏教系のものにひかれ出して、それが最終的には中世の考古学というところにつながっています。

しかし、基本的には最初から中世の考古学をやりたくて、大学時代に勉強し始めるという人はほとんどいないでしょう。ですから、中世考古学の研究会や学会などには学生はほとんど参加していません。だいたい皆さん、文化財の現場などで働いて、調査をしている中で中世の遺跡にぶつかって、その過程で興味を持ってやり始める人が多いのではないでしょうか。

永越さんなどは学生のころから中世の論文を書いていますよね。かなり珍しかったのではないですか。

永越　実は私、卒業論文とか修士論文はお城とか居館とか、そういったもので書きまして、そこから派生してきて集落に進んだわけです。

松田　中世史をやっている人が少ない中でさらに集落の研究をするのは、事例などを集める上で、あるいは研究の方法を考える上でも大変だったと思うのですが、関東の中世集落を研究するにあたって難しかった点や、魅力的な部分を教えていただけますか。

永越　先ほどの話の中でも少し触れたのですが、とにかく今、日本で行われている集落の発掘調査は、ほぼ行政による発掘なんです。要は地方自治体ですとか財団がやる調査です。最近は民間の発掘会社もあります。そういった調査は開発や工事の代償として発掘をするのですが、そうすると発掘される範囲は限られます。集落はかなり広い範囲に及びますが、それを丸ごと発掘した事例は、私が知る限りはほとんどありません。

集落の全体像も分からない、なおかつ、建物が完全に復元された事例もほとんどないという中で、どうやって集落というものを捉えることができるのかが課題でした。最初はこれをどう乗り

越えていこうかというところで、相当悩みました。

松田　入学当初から中世の集落をということだったと思うのですが、研究計画書をご覧になった村木さんはどういう印象を持ちましたか。

村木　これは時間かかるぞと思いました。三年では無理だなと思いましたが、それでも、こういうテーマでやろうという人はしばらく見ませんでしたし、ここで永越さんがやらなかったら、もうこの研究テーマはずっと進展がないなと思ったので、早くから、何年かかっても大丈夫ですから、という話はしていましたね。

永越　そうですね。実際、相当年数がかかりまして。五年間在学していられるのですが、途中に休学もしていますので、七年かかっているんです。おそらく博論提出までに最も長くかかった学生のうちの一人ではないかと思います。

松田　七年をかけて書かれた博論ですが、村木さんはどのように評価されましたか。

村木　最初に永越さんが入学試験で出された計画はしっかりとできていたのですが、取り上げていたのは関東の中では珍しく大規模に発掘調査をしている事例で、そういう事例はもう増えてこないだろうと考えておりました。ですので、このテーマに沿った事例を増やすために、永越さんが持っていた集落イコール農村という概念以外にも、さまざまなタイプの集落イメージを持つように、目先の向け方、出方を意識するように伝えました。

それから、永越さんの強みは、ご自身も発掘調査をなさっていることです。大規模な発掘調査ができなくても、関東の本当に小規模な発掘事例をパッチワーク状につないでいくと、集落の部

分部分が見えてきて、そこから何か復元できないか。そうした手法で彼はかなりオリジナリティーを発揮していましたので、そういう意味では最初はどうしようかなと思っていましたが、すごく努力されたと思います。

博論の外部の審査員には、日本の中世考古学の集落の権威のお二方をお願いしたのですが、こんな研究ができるんだねという言い方をされて、非常に褒めていらっしゃいました。研究手法のオリジナリティーもそうですし、関東の集落でないとできないものの見方が評価されたようです。七年は本当に長かったでしょうけれども、充実した時間だったのではないかと思っています。

松田　永越さんが在籍された二〇二〇年までの七年間は、村木さんが琉球の調査をされた期間とかなり重なっていると思うのですが、やはり永越さんの関東での研究を横で見ながら、琉球で新たに考えることはありましたか。

村木　琉球でやったらもっと面白いことができるのにな、というふうには思っていました。永越さんが行き詰まったら、南の島へ連れて行ってあげるよ、ここにもっと面白いものがあるよ、と言ってたんですが。結局一度も連れて行けませんでした。そのうち行きましょうね。

永越　お願いします。

松田　私は専門が民俗学なものですから、きちんと理解はできていないと思うのですが、今日の永越さんのお話を非常に面白く伺いました。最初に出てきたムラ、ノラ、ヤマの概念図は昔の民俗展示でも使っていましたし、提示された関東の村の四類型についても、民俗学などですと、東の散村と西の集村という考え方につながります。この佐倉のあたりもそうですが、やはりぽつ

ぽつとあまり固まらずに屋敷が点在している。そういったことを思い浮かべながら、今日お話を伺っていました。

最初の概念図のところでも、やはり民俗学や歴史学で使われているものだとお話しいただきましたが、総研大で勉強している中で、こういった他分野の成果は意識されていたのでしょうか。

永越　特に地形のところのお話もしましたが、そういったところで専門にされている先生からも、入学当初の一年次に、本当にマンツーマンで教えを受けたこともあります。

松田　方法論が一つの悩みだったというお話でしたが、そういった部分でもやはりさまざまな分野から勉強されていった部分が大きいということでしょうか。

永越　そうですね。方法論については入学する以前から漠然とした部分があったのですが、入学してから村木先生にいろいろと方向性というか軌道修正をしていただきながら、自然に固まっていったのかなと、今から振り返ってみるとそんな気がします。

松田　先ほどの集村、散村の話に戻るのですが、歴博の第四展示室（民俗）の最後のほうに西物部集落という琵琶湖畔の集落の模型がありまして、現在、その模型は水田稲作の集落の一例として展示しているのですが、もともとは西日本型の集村を示す模型として作られたものなんです。

この集落などを見ると、真ん中に集会所や神社があって、その周りに家が展開する形が見られるのですが、今回ご紹介いただいた集村型の集落には、何か核になるような施設とかは見いだせるのでしょうか。

永越　調査資料からは、例えば中核になる鎮守のようなものですとか、なかなかそういったも

のは見いだせないのですが、単に発掘で見つからなかっただけ、あるいはそういうものが見落とされているという可能性はあると思うんです。

ただ一方で、そういったものに比定できるものもなかなかなくて、おそらくそういったシンボル的なものはあった可能性はあると思うのですが、発掘の成果からは決定的なものは見いだしにくいというところはあります。

それと、少し話が飛んでしまうのですが、松田先生からも集村、散村の話がありましたが、実は西日本の研究では散村から集村へ変化するという考え方が、九〇年代ぐらいまでの考古学の集落研究では主流だった気がするのですが、その辺に対して私は疑問に思うところがありました。果たして本当にそういった流れなのかなというところもあって、こういった研究を少しやってみようかと思ったしだいです。

答えになっていなかったかもしれませんが。

松田　そうすると今日のご発表などは、同時代の中でこういうさまざまな集落の形があるんだという、散村から集村へという学界の定説とはまた違う考え方の提示という捉え方をしてよろしいのでしょうか。

永越　おそらく一律に集村化したというわけではなくて、集村的なものもあれば、散村的なものもあったでしょうし、あるいは中間型のものもおそらくあったでしょうし、集落の形は本当は多様だったと思うんです。でもそれを一個一個示しても非常に分かりづらくなってしまうこともありまして、ああいった類型化を行った次第です。

松田　そうした多様な集落の成立の要因として立地などを考えられたということですね。

永越　おそらく人が暮らして生業を営む中で、どこに住むかは非常に大きな問題だったと思うんです。例えば、谷戸とか谷津のようなところには住みづらいのですが、でもあえてそこに家を建てるのは何かしらの目的があったでしょうし、そういった立地環境は集落を考えていく上では一つ非常に重視すべきことかと思っています。

松田　今日は関東、東国における中世後期の集落ということで、たくさんの事例とその類型をお示しいただいたわけですが、関西をはじめとする他の地方と比べたときに、この時期の東国の集落の特徴のようなものは見いだせるのでしょうか。それとも、今回ご紹介いただいた東国の事例をもっと広く敷衍していくべきと考えているのでしょうか。

永越　今、先生がおっしゃったことは、実は博士論文を出したときも審査に当たられた先生方から頂いていた今後の課題です。これからどれぐらいかかるか分からないのですが、西日本はどうだったのかといった地域的な差異や、中世前期はどうだったのかといった時間的な変遷といったもっと幅広い観点で見る必要はあるかなと思っています。ただ、そういった研究はまだ私も全然できていない状態です。

今日お話ししたことの中には、関東の特徴を示す部分もおそらくあると思うのですが、これが西とは違う関東独特のものだというところを、なかなかはっきりと言いにくいところはあります。まだ他地域との比較までいっていないので、これが特徴だというところまではたどり着いていません。それは今後の私の目標でもあり課題でもあります。

松田　そうすると、学界でも今後の展開が期待されていると考えてよいのでしょうか。

村木　そうですね。永越さんの研究で、東日本にしか見られないというものが確実にあったことが分かりました。西日本の中世後期の集落は礎石の建物に変わっていくので、遺構に残りにくいという弱点があり、案外わからない部分が多くあります。それに対して東日本はこの時期にも掘立柱なので遺構に残りやすい。そうすると、これまでの集落論の研究を引っ張ってきた西日本の研究者たちが、自分たちの知らなかった中世後期を、永越さんの研究を見ることによって考え直すことができるようになってきた。

そういう意味でも、永越さんの博士論文の書籍化が一刻も早く待たれるところかと思われます。

松田　また一つ仕事が増えますが。

永越　ありがとうございます。そういうふうにおっしゃっていただいて非常にありがたいことと思っております。

まずは博論でまとめたことを一つ世に出したいと私も感じていますので、そこを目指してやっていきたいと思います。それから、中世前期も視野に含めて研究すること、西日本を含めた列島単位というと非常に大げさな話かもしれないですが、もう少し広い視野での分析をすること、そういったことも今後やっていく必要があるかと思います。

ただ、やはり個人でやるには非常に荷が重いところもありまして、そういったことを一緒にやっていただける同志の方も募っていけるといいなと思っています。

松田　そろそろ時間がまいりました。総研大への進学をお考えの方もいらっしゃるかと思いま

す。そういった方に永越さんから何か一言いただけますでしょうか。

永越　私は総研大に長くお世話になりまして、時間はかかりましたが一つ論文としてまとめることができました。

総研大の特徴は、非常にいろいろな分野の先生が多数いらっしゃるところです。例えば私が所属した日本歴史研究専攻は歴博に拠点がありまして、学生の数より先生の数のほうが多いという、他大学とは違う環境にあります。さまざまな分野の先生にいろいろな質問ができる、いろいろな教えを請うことができるところは非常に魅力的だと思います。

あと、在学中はさまざまなところに研究調査に行かせていただきました。そういったところでもサポートしていただけて、非常にありがたかったと思います。

総研大に入ってから、研究の視野が広がったところはありますね。ものの見方もそうですし、私は土器の研究もやっているのですが、総研大に入ってからさまざまな観点から土器を見る見方が身に付いたところもあります。それはやはり村木先生をはじめとするいろいろな先生方からの教えがあって、成長につながったのかなと思います。

そういった意味では、ほかの大学にはないような魅力が総研大にはあるなと思っていまして、もし入学を希望される方がいれば、ぜひ総研大のことをいろいろお調べになって、検討してみてはいかがかと思います。私は非常に魅力的な場所だと思っています。

松田　ありがとうございました。私の研究分野は違いますが、今日の永越さんのお話は非常に面白くて、私自身も別の分野の研究に触れることができて大変勉強になりました。

もう時間が過ぎてしまいました。本日の総研大の大学院講演会は、以上をもちまして終了とさせていただきます。永越さん、村木さん、ありがとうございました。